

鎌倉初期以前の成立とされる『中臣祓記解』『訓解』は両部神道の代表的典籍である。神道の中臣祓を密教的解釈で論じた両部神道・仏教神道書であり、のちの伊勢神道の成立にも強い影響を与えた。その書き手、制作の場は、天台宗園城寺および伊勢神宮の法楽寺院である仙宮院に關係した僧侶によって作られたと推定した。伊勢神宮の南方、度会郡南伊勢町に所在した仙宮院は、伊勢の神仏關係の拠点となつた。この仙宮院の院主に、行基・最澄・空海・円仁らが就任し、神宮のために法会を勤めたという記事は、今から見れば荒唐無稽であるが、錚々たる高僧の伊勢周辺での活動伝承は、重源に代表される僧徒の参宮、僧侶の神祇重視の姿勢を先取りしている。中世神道の発生源は伊勢神宮の周辺にあり、伊勢神道の形成の前提には、伊勢周辺で生まれた両部神道の活動が存在する。初期の伊勢神道は「伊勢両部神道」と呼んだ方が正確である。

『中臣祓記解』の発見とともに、伊勢神道へ繋がりをもつ『漢朝祓起在三月三日上巳』『中臣祓義解』の典籍が新たに加わり、『中臣祓記解』の成立に關わる『三角柏伝記』『宝志和尚伝』なども紹介されて、未刊資料の翻刻は進み、『神道大系』『真福寺善本叢刊』まで、着実な作業がつついてきた。

中世神道研究は今、岐路にある。戦前・戦後を通して、久保田収・西田長男・近藤喜博氏らによって研究が進められてきたが、近年、顕密体制論と中世日本紀論が歴史学と文学の両方面から大きく取り上げられ、神道と仏教に關わる研究は新たな段階に突入した観がある。従来の伊勢神道説と新たな研究の胎動とは、平行線を辿つたまま、「すれ違い」（井上寛司氏の指摘による）状態にあるとされる。研究の整理と関連典籍の収集と公刊は、「すれ違い」を少しでも解消し、研究の土俵作りに寄与できると思われる。今次の展覧会とシンポジウムの開催は、その溝を少しでも埋める作業を志すものといえる。

名古屋の真福寺所蔵、度会行忠の自筆本『御鎮座伝記』（大田命訓伝）が七十年ぶりに再発見された。軸木から幻の「行忠之」の墨書があらわれた。伊勢神道の大成者とされる度会行忠の唯一の自筆である。伊勢両部神道を超えて度会行忠・常良の伊勢神道へと繋がる思想の展開と典籍の伝来が確認できたことは、大きな広がりをもって新たな研究に参画できる態勢が整えられたといえる。